

古市古墳群の小さな古墳たち

〜その実像にせまる!〜

6 エピローグ

これまで、古市古墳群の中の小さな古墳について、6つのまとまりに分けて見てきました。

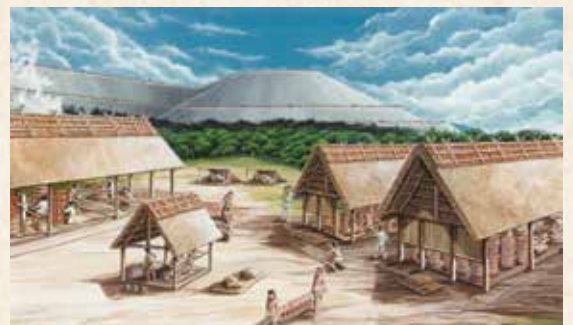
糸を紡ぐ道具である紡錘車ぼうすいしやが副葬されている古墳があり、当時貴重品であった糸や布を生み出す道具を副葬した古墳は小さくても、そこに葬られたのは身分の高い人物であったことを述べました。また、家・盾たて・蓋かぶた・鞞ゆき・甲冑かっちゆう・馬といった、さまざまな種類の形象埴輪けいしやほにわが小さな古墳から見つかり、大きな前方後円墳に立てられたものと同じ種類があることから、家形埴輪に死者の魂が宿り、それを盾などの形象埴輪で守るといふ共通した思想が、古墳の大小に関わらず同じであったと考えました。



▲円筒埴輪(赤子塚古墳出土)



▲発掘調査で見つかった、埴輪を焼いた窯の跡(土師の里南埴輪窯跡群)



▲埴輪を作っている様子

ところで、今回対象とした、陪塚ばいづか(大きな古墳の周囲で付き従うような小さな古墳)ではない小さな古墳たちは、大きな前方後円墳とどのような関係にあったのでしょうか。大阪大学木村理あきむらさんの円筒埴輪えんとうほにわについての研究成果が、このことを解くヒントとなると思います。

木村さんは、古市古墳群の各古墳から出土した円筒埴輪を詳細に観察されました。そして、大小さまざまな古墳の円筒埴輪の特徴を抽出されました。その結果、次のような結論を導かれ、『考古学研究』という学術誌で発表されています。

①古市古墳群で古墳が築造された期間の前半頃は、小さな古墳に立てられた

円筒埴輪は大きな前方後円墳のものと特徴が酷似している。このことから、古墳の大小に関わらず、同じ工人しゅうじんの集団が製作を担ったと考えられ、大きな前方後円墳を中心とした、拠点的な埴輪生産が考えられる。

②期間の中頃になると、古墳ごとに円筒埴輪の特徴に相違が認められる。このような相違については、同じ工人の集団が作り分けたのではなく、古墳ごとに別個の工人の集団が製作を担ったと考えられる。

③期間の後半頃になると、一時的に①のように、同じ工人の集団が円筒埴輪の製作を担った状況も看取できる。しかし、期間の終末になると、ふたたび古墳ごとに別個の工人の集団が製作を担うようになる。

以上の木村さんの研究成果から、古市古墳群の大きな前方後円墳に立てる円筒埴輪と小さな古墳に立てる円筒埴輪は、当初は一つの生産体制の中で作られていたのが、その後、別個に、古墳ごとに生産されるようになるということが分かります。

このことは、小さな古墳の築造が、当初は大きな前方後円墳に影響を受けていたものが、時代の経過とともに、あまり影響を受けずに築造されるようになることをあらわしていると考えられます。小さな古墳は、当時の社会の中にありながら、大きな前方後円墳から独立した存在としての歩みを進めていたのです。

(文化財保護課 新聞 義夫)